
メモダス

yuunagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモダス

【Zコード】

Z0270BA

【作者名】

yuuna_gyu

【あらすじ】

暴君こと水無月アスカのせいで春休み最後の休日を返上する事になつた如月瑞希とアスカの弟、水無月アキトの二人はいつも通りこき使われていた。その日の帰り道、瑞希は不思議な雰囲気を漂わすシスターと出遭い、他愛のない会話をした次の日にシスターさんと見た目がそつくりな転入生が登校初日に突然「私は……私を殺せる人を探しにここへ来た」と、爆弾発言をしてクラスを凍りつかせたのだが……。

序 章／死にたがりの少女／ 前 篇 其の一

不思議な不思議な夢を見た。

周りには何もない見渡す限り真っ白な景色が広がる空間にポツリと佇む一人の少女……。

虚ろな表情を浮かべながら上を見上げて細くてしなやかな透き通る肌質の両腕を差し出して何かを求めているような。まるで、この何もない真っ白な空間から誰かが手を差し伸べ助け出してくれる事を待ち続けているようだった。

けれど、それは叶わぬ願いだと少女は薄々感じていた。時の流れさえ不確かなる空間で一体どれだけの歳月が経過したのだろうか。いつからこのような事を続けているのだろうか。そして、いつまで続けるべきだらうか……。

それでも少女は眉一つ動かさず、虚ろな表情のまま差し出した腕を下ろさずに続けた。それが叶わぬ願いだらうとなんだらうと少女は少しでも可能性があるならと、祈りを捧げるようになまけの無い瞳をゆっくり閉じて

「はい。却下」

呆れ果てた表情を浮かべてテーブルに叩きつけるように弔子を投げ飛ばし無情にも没宣告を告げるカチューシャを付けたセミロングの凛々しいお顔立ち、すらりと伸びた手足に非の打ち所が無い出るところ出たコケティッシュな体躯の少女。水無月アスカは窓に寄りかかるように身を預けた。

「決断早えよ、姉貴！」

アスカの無情な宣告に納得いかずテーブルを勢いよく叩き、立ち

上がりながら怒号を上げた少年。少女と瓜二つの顔付き、筋骨隆々とまではいかないが長身のがつちり体型である弟の水無月アキトは怒号を上げた後に静かに着席した。

「アキの言い分は分かるわ。だけど、根本的につまらない」

眉一つ動かさず淡々とした口調で吐き捨てるようにアキトの書きあげた最初で最後の今世紀最大の作品を酷評したアスカは額を押えて大きく嘆息する。

まだ、序盤中の序盤。出だししか目を通していないのに、判断を下すのは少し早計過ぎやしないか、と心の内に留めながらも顔に出でてしまっていたのか。アスカが眉間にしわを寄せてこちらを睨みついているのに気付き、僕は目を逸らし少し咳き込みながら誤魔化した。

「まあ、いいわ。私がアンタ達に期待したのがそもそも間違いだつたわ。やっぱりこの退屈過ぎる生活を打破する為には私自身どうにかするしかないわね」

腕を組み仁王立ちをして凜々しい態度で僕達の事を嘲笑うかのように切り捨て、顎に手を添えて何か企んでいるのか思案顔になつた。

つたく、だつたら最初から自分で何とかしろっての……。

僕が心の中でアスカに対し悪態をついていると弟であるアキトが姉に聞こえないように小声で、

「なあ～キサラ。そんなにつまらなかつたか、コレ……」

姉にボロクソに言われ、少しムスッとした表情を浮かべながら彼が書きあげた作品が綴じられた冊子をこちらに提示して僕に意見を仰いできた。

ふむ、と僕は冊子に手を伸ばして流し読みではあつたがアキトが書き綴つた「仮題 閉じられた少女」に目を通した。

主人公の少年が毎夜毎夜見る不思議な夢に登場する虚ろな表情を浮かべる少女は一体何者なのか？ なぜ、少女は真っ白な空間に閉じ込められているのか？ なぜ、少年はこのような不思議な夢を見るのかという話のようだ。

「いや、お前は頑張った方さ。初執筆の僕達にたつた十分で短編を書けと命令し、出来上がるや否や少し目を通しただけでつまらんと言つてテーブルに叩きつけるアレがどうかしているとしか思えん」アキトに労いの言葉をかけた僕は伸びをしつつ背もたれに寄りかかり天を仰ぐ。その際に少し椅子が傾きバランスを崩しかけたのは当然の事ながら秘密だ。

「姉貴の悪口を言つなあああ！」

突然、アキトは体を震わせながらアスカの悪口（？）を言つた僕に対して唾を撒き散らし頬を上気させて怒号を上げる。

「黙れ、シスコン！」

「いや、黙らんぞ！ あんなんでも俺の大切な姉貴だ！ 誰でもうと姉貴の悪口を叩く奴は俺が許さねえ！ 姉貴の悪口を言つていいのはこの俺だけだ！」

弟である俺だけの特権だと誇張したいのか、アキトは両親指で自分の事を指さして意味もなくはにかんでみせる。

「あ～だつたら、僕の代わりにお前の後ろで不気味に微笑みながら仁王立ちをしている姉貴に向かつて一言言つてくれ」

「承知した。ホント、あのクソビッチは

「ア～キ～く～ん。あのクソビッチって誰の事かなあ？」

僕の代弁者たるアキトの背後から口元を歪ませ凄惨な笑みを浮かべながら抱きつき耳元で囁く、ク 水無月アスカ様……。

アスカ様のしなやかでお美しい腕がアキトの首に絡み、最初は抵

抗をしていたものの徐々にアキトの顔色が青ざめていき、田が白目をむき口から泡を吹いていた。それを特等席で田の当たりにしていた僕は手を合わせて、

「南無～」

「まだ、死んでねえ～わ！」

ハアハア、とよっぽど苦しかったのだろう、アキトは肩をならし過呼吸のように必死に息を吸う。

「アキをいじめちゃダメよ。シゲル」

今し方、弟に行つた教育（？）という名の暴力的行為は何もなかつたかのようアスカは微笑み、あたかも僕がやつたかのように裝う。

「直接手を下したのはお前だろ？」

僕は一応ながら後ろにいると教えてやつたのだが、あの馬鹿が調子づいて口を滑らしたに過ぎない。決して誘導なんてしていいぞ。

「それはそれよ。そんな事よりもシゲルも私に何か意見がお有りなのかしら？」

笑顔のまま手と首をパキポキと鳴らし意見を言おうならば即手下せるように慣らし始めた。

「いえ、何にもございません！」

僕はアキトの一の舞になるのだけは避けるべく、ご機嫌を損なわないよう椅子からすぐさま飛び上がり深々く土下座をした。腕が三角に綺麗に折れていたと思つ。

「ん？ プライド？ ナニソレ？ モモジワカンナイ……。

「そう、ならいいわ。それと今日はもう解散よ。また、明日からよろしくね」

そう言い残してアスカは野郎一人を残してすたすたと部屋を出て行つてしまつた。

僕は少し一安心して椅子の隙間を縫うように手足を伸ばして床に転げ寝る。

「アキト、生きてるか」

「……ああ、大分マシになつた」

肩をならして呼吸を整えていたアキトの生存確認を済ませた僕はゆっくりと瞳を閉じる。

『……はあ～』

野郎一人の大きな溜め息が部屋の中で虚しく木霊した……。

序 章／死にたがりの少女／ 前 篇 其の一

ちょうど一年前の入学式での事だ。

特にこれと言った趣味も楽しみもなく、毎日毎日作業のよう決まった時間に起き、決まった時間に食事を取り。何気なく学校に通っていた僕は何のこだわりもなく適当に選んだ高校に進学して、これから新しい学生生活が始まるぞと言った心構えもなく。ただただ無心で桜が咲き誇り風が吹くたびに舞い散る桜が成形する桜の絨毯を歩いていた。

僕と同じブレザー制服を着てこれから始まる高校生活に胸を躍らせてはしゃぐ同級生達を目の当たりにして僕は思わず首を傾げた。

当時の僕に　いや、今でもそうかも知れないが意味の分からない光景だった……。

別に娯楽施設に向かう道中つて訳でもあるまいし、何がそんなに楽しいのか。学校をテーマパークか何かと勘違いしている馬鹿なのが。

あるいは昔、中学の時に「学校楽しくない」などとほざいていた輩がいたがアレと同じ類の人間で学校と呼ばれる場所に何かを期待している阿呆なのか……。

そんな考えを巡らせながら到着した、これといった特徴もないどこにもある平凡な造りの公立高校……。適当に選んだだけあってこの学校の特色やら校風は全く分からぬし、僕が通う高校はこの学校で合っているのかさえ分からない。

だけど、体育館らしき建物に向けて歩く僕と同じブレザー制服を着た生徒達が周りにいるのだから合っているのだろう。第一、僕は入試試験などで何度も来ているはずなのだが、はつきり言つて全然記憶になかった。それどころか高校生になつた実感すらなかつた。考え方や気持ちが中学生の頃と何ら変わりがないからなのか、た

だただ通う場所が変わったという印象だけしかない。

ふむ、また退屈な作業の日々が始まるのか……。

演壇に立った校長なのか教頭なのか分からない中年代の男性が新入生に向けて話を始める。

周りの生徒達は演壇で流暢に話をする中年男性の話を真剣に聞き入っていたけれど、僕は校歌らしき歌詞が描かれた掛け軸のようない物の近くにあつた時計を眺めていた。早く時が過ぎるよう念を込めて……。

はつきり言つて苦痛だった。

季語を巧みに織り交ぜて上手く話しているつもりだろうけど、そんな事はどうでもいい。さっさと話を切り上げて解放してくれと願うばかりである。

すると、僕の想いが届いたのか話が終わり各自のクラスに向かう事となつた。

他のクラスの生徒達の波に呑まれないように辿り着いた何の変哲もない教室で、一年B組の教室で僕は目を付けられてしまつた。

いや、巻き込まれたと言つた方がいいのかも知れない。

自席に座つていると突然、見知らぬポニー・テールの女子生徒に、「君は、生きているの?」と訳の分からぬ事を平然とした態度で僕の目を見て聞いてきたのだ。

生きているの? と唐突に聞かれて呆気にとられながらも「はい、生きていますよ」と馬鹿正直に答えればいいのか分からずに黙つていると、「私は、絶賛仮死状態中」とこちらは何も聞いちゃいないし何も言つていないので関わらず、女子生徒は嘆息交じりに訴えかけてきた。

この女子生徒がさつきから何を言つてているのか全くもつて謎だが、初対面の相手にする話では決してない事だけは理解できた。

「ねえ、退屈つて人を殺すと思わない？ 私は殺すと思つ。だって、生きてる心地すらしないでしょ？」

僕の反応なんて知つたこつちやないと言わんばかりに自論を展開する女子生徒に僕は少々気後れし、顔も引きずつっていたと思う。

「だからね。君も私と一緒に生きたいと思わない？ 君を一眼見た時にビビッと身体に電気が走つたんだ。私と同じ人種だとね……」

自分と同じお仲間を見つけて嬉しかつたのか瞳を輝かせ、少し語氣を荒げて言う女子生徒に僕は嫌気が差していた。

これが所謂空気が読めないって奴なのだろうか。ここまで人の顔色を間近で観える距離でいるのにも関わらず話を繰り出せるつてある種の才能を感じられる。それに傍から見ていると逆プロポーズをされているように見受けられるし……。

「いや、一人盛り上がつている所すまないが……僕は君が思つているような人間じやないと思つ」

「いえ、君は私と同じく退屈の日々を暮らす死者も当然の存在よ。浮遊霊のように流れに身を委ねながらでいいの？ 私はごめんだわ。折角この人格で生を受けたのよ。だつたらこの人格でしか味わえない人生を楽しまなきゃ損よ」

僕の言動で熱が入つたのか、バンと机を叩きさらりと自論を展開する女子生徒。

ああ、火に油を注いでしまつたな。さらに瞳をキラキラと輝かせている。それに思いのほか机を叩いた音が大きかったのか、周りにいたクラスメイト達が何事かこちらを見つめているのに気付いた。

「君は生者になりたくないの？ 毎日が作業のような機械じみた

日々を送つてていいの？ 私は嫌だわ

それでも女生徒は周りの視線なんて知つちやーつちやねえと一蹴するかのように声を荒上げて口走る。

ああ、分かつた。これはアレだ。宗教か何かの怪しげな団体の勧誘なんだな。誘致入数のノルマを達成しないと現在置かれている地位から降格されるみたいなシステムか？だから、ここまで必死に熱弁しているんだな。まるでマルチ商法みたいだ。

うん、だとしたらだ。周りのクラスメイト達を巻き込む訳にはいかないよな。目を付けられたのは僕なんだし……。

まあ、本音を言えばクラスメイト達の事なんてこれっぽっちも考えていない。そつとこの状況を打破したい、ただそれだけだ。

「ああ、分かつた分かつた。降参だ。話なら後でたつぶりとビーッ
ぶりと聞いてやるからこの場は引いてくれ」

僕は息を吐いて女生徒の熱意にやられて少し心が折れたように見せた。もちろん嘘だ。この状況を打破されすれば、僕の勝ち。後はとんずらすればいい。

「そう？ なら決まりね。じゃ、行きましょうか

女子生徒は手を叩きそつと僕の腕を掴んで走り出していた。
僕は状況を飲み込めず呆気にとられる。この女生徒は僕の話を聞いていたのか？

いや、これっぽっちも聞いちゃいないな。

半ば強引に僕は女子生徒に引っ張られるような形で不本意ながら教室を後にすることになり、どうこう道筋で辿り着いたかさえ分からぬ、とある部屋で僕は女子生徒と顔がそつくりな男子生徒と出会う事になった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0270ba/>

メモダス

2011年12月31日18時49分発行